



謙澄と行く日々

題字
棚田看山

最終回

日露戦争が勃発した明治37年、ヨーロッパに燦る黄禍論（黄色人種が勢力を増せば白人人種に禍を与えるとする論）を鎮静すべく特命を受けて渡欧した末松謙澄は、英国留学の経験があり、謙澄が通信大臣時の秘書官だった仏教学者の高橋順次郎と郷土の旧制豊津中学校出身で英語は堪能、ドイツ情報に詳しい誠実な教育学者の友枝高彦を随行させた。謙澄49歳、高彦は27歳であった。

友枝高彦は明治9年上毛郡大村（豊前市大村）の大庄屋・友枝家に生まれる。熊本の五高時代はラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の教え子。近年友人と三人でとった講義ノートが見つかり、ハーンの五高時代を知る貴重な資料として注目されているという。当時の校長は嘉納治五郎、高彦は終生「魂の親」として敬慕した。

友枝高彦

太平洋戦争後は一時期郷里に引き揚げていた。末松謙澄が母方の大伯父に当たる謙澄研究家の



故玉江彦太郎氏は、その著「青萍・末松謙澄の生涯」の中で、昭和27

～日露戦争時、謙澄の渡欧に随行～

年、東筑紫短期大学学長だった高彦を困んで「謙澄先覚」を語り合ったという。その思い出話によると「横浜出航の際には、見送りの中に伊藤博文の姿もあった。ヨーロッパで謙澄は多くの会合に顔を出して『ロシアと日本』如何にしてロシアは戦争をはじめたか』を英語で講演した。K・末松の英語のスピーチは上手ではないが、文章は素晴らしいというのが大方の批評であった。謙澄は毎夜遅くまで書齋に籠り、寝につくのは十二時近くで、私はいつも、先に休むように言われた。』などと述懐している。

豊前市の天地山公園に程近い友枝記念公園には高彦の功績を称えた銅像（中野素昂作）がある。過日、大庄屋だった旧友枝家を訪ねた。地区の公民館長から「竹藪ばかりですよ」と聞かされたがまさにその通りの竹藪。「友枝家資料館」もあつたらしいが、看板は色あせていた。日本倫理学会の先駆者で、日独の文化交流にも尽くした郷土の偉人の屋敷跡、何とかならないものかと一抹の寂しさを感じた。

（文化人末松謙澄を考える会 徳永文晴）